

発行所
カトリック長崎大司教区
本部事務局
〒852-8113
長崎市上野町10-34
カトリックセンター内
TEL 095(846)4246
FAX 095(842)4460

イエスの宣教を 受けつぐために

イエズス会司祭

岩島 忠彦

(一)

最近ミサで朗読されたマルコ福音書1:29-39を読み、あらためて宣教とは何かを考えさせられました。

そこでは、イエスがペトロとその兄弟アンデレ、また仲間のヤコブとヨハネを伴ってペトロの家を訪問し、熱で床についていたペトロのしゅうとめの手を取って癒したこと、しゅうとめはすぐに元気を回復して一同をもてなしたことが、まず書かれています。

この描写は、非常に素朴で親近感のあるもので、私たちも身近な人たちに同様な「いやし」をもたらすことができるのではないかと、といった気持ちを起こさせます。

福音書は、さらに、イエスが町中の病氣の人をいやしたこと、夜通し祈られたこと、弟子たちが呼びにきたことなどが書かれています。

これに対してイエスは「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは『宣教する』』と言われ、「そして、ガリラヤ中の会堂に行き、『宣教し』、悪霊を追い出された」と結ばれています。

こうした福音箇所を読むと、イエスの福音宣教とは、単なる教えでもなければ、人々を驚かすような奇跡の業でもなく、周りの人々をいやし、和ますような、具体的な愛の業であったのだと感じさせられます。

(二)

第二ヴァテイカン公会議以来、教会における信徒の中心的役割が強調され、「私たち一人ひとりが宣教者」といった合言葉が繰り返されてきました。

ただ多くの信徒は、「宣教」という言葉の前にたじろぐのが現実ではないでしょうか。カトリック教会では、司祭、それも外国人宣教師が、要理を教え洗礼を授ける、このような業が宣教であるという意識が強くありました。

しかしこうした「宣教」(ミッシヨンのイメージと並んで、公会議以来「福音宣教」(エヴァンジェリゼイション)という言葉が強調されてきました。

これはかたい言葉で言えば、福音的価値観を自ら生きることによって、これを社会にももたらす、ということになるかと思えます。もっと具体的に言えば、神さまの慈しみに信頼している私たちが、まわりの人たちにも同じ思いで接し、いくばくかの人たちの慰めや喜びの元となるということなのだと思います。そしてそのようなことこそ、冒頭で触れた福音書でのイエスの「宣教」の実体な

のだと言えるのではないのでしょうか。

(三)

イエスが神の慈しみと寛大さを宣べ伝えたのは、自らの行動と証しによるものでした。小さくされた人々、経済的にも、宗教的にも差別され、圧迫された人たちに寄りそうようにして、彼らの友となり、彼らの体だけでなく心をいやし、打ちひしがれた人間性そのものを回復されたのです。

為政者や金持ち階級、とくに宗教関係者のエゴイズムと対決し、神さまの御心、その真実を証しされ、イエス自身は聖職者ではなく、一介のユダヤ教徒でした。

このようなイエスの福音宣教を思うと、「私たち一人ひとりが宣教者」との呼びかけは、大きなチャレンジではあっても、信徒にとって決して異質なもので、あるいは応えようのないものではないということがお分かりいただけるのではないかと思います。

(四)

今、教会は宣教師の時代を終えようとしています。日本のカトリック教

会の発展維持に大きな貢献をして下さった宣教師の方々も、大半はご高齢に達しておられます。

さらに邦人司祭の召し出しも昔よりはかばしくありません。こうした状況下で、ほとんどの教区が、小教区の統廃合あるいは合同宣教師司牧といった計画を立て、司祭に代わって信徒が祭儀司式、要理教育、聖体奉仕などに携わる準備をすることが勧められています。

こうした流れにおいては、やはり信徒が聖職者の代わりとして、いたしかたなく動員されているといった印象は正直否めません。しかし、キリストと御父の慈しみによって、神の子の生命に与っている私たちが、まわりの人々に御心の恵みの力をもたらし、まず信徒によるイエスにならった宣教の本筋なのだと思います。

このような、自然で地道な生活における信仰の証しがあるとき、小教区における信徒の役務も地に足のついたものとして実践され、本物の信徒中心の教会が、実現するのではないのでしょうか。

（岩島忠彦神父様は、一九九九年十一月ザビエル渡来四五〇年を記念して開催された「西日本宣教師祭大会」で、基調講演をされ、現代教会の宣教観の変化について貴重な示唆をくださいました。なお、そのときの演題は「唯一の福音、二つの宣教観、ザビエルが目指したものの、公会議が目指したものの」でした。（編集部）

Q & A



「西日本宣教

司祭大会から十年」

Q. これまで耳にタコができるほど「宣教」ということばを聞かされてきました。しかし長崎教区は一向に宣教に向っているようには見えません。どうしても私たち信徒にとっては「宣教」ということばを聞くと、つぎの瞬間「わたしたちにはできない」という反応を示してしまいます。どうしたらこの悪循環を断ち切ることができるでしょうか。

A. 第一面に岩島忠彦神父様が述べておられるように「宣教」ということばにまどわされず、「神さまの慈しみに信頼している私たちが、まわりの人たちにも、同じ思いで接して、いくばくかの人たちの、慰めや喜びの元となる、ということだと思えます」。長い間、キリスト教生活とは、知識としての教義を覚えることであり、掟を守ることですべてであるかのように捉えられてきました。

掟や教義を学ぶことは、とても大事です

が、その学びによって、イエス・キリストと出会うことができたかどうかということ、もっともっと大事なことです。

のみならず、このことを取り違えると、窮屈な律法主義・教条主義におちいり、まわりを慰めることもいやすことも出来なくなることであったのです。

それよりも何よりも、神さまは、長崎という場所に生きる私たちを通して、いろいろな人々をすでにご自分のもとへ呼んでおられる、という確信を持つことが大事だと思います。

今年（二〇〇九年）三月一日付のカトリック新聞の第三面に、来る復活祭に受洗する一人の方が紹介されています。長野の池田さゆりさん（29）です。

彼女は洗礼を受けるきっかけについてこう言っておられます。「一年前に長崎を旅して、いろいろな教会を訪ねたことが、キリスト教に関心を持つきっかけになりました」と。

Q. 最近、教会群の世界遺産化などの動きがあり、巡礼者も増えているので、そのような人もたまには現れるかもしれませんが、大部分は単なる観光をして、通り過ぎてしまっているのではないのでしょうか。

A. 数的に言えば、言われるとおり、受洗に結びつく例はめったにないかもしれません。

ここでもわたしたちが、よく注意しないとおちいってしまいう迷い道があります。それは、宣教とは根本的に神の仕業だということをお忘れしましょう。

ここを押えておかないと、いたずらに人間による人間の判断が前面に出てきて、鼻持ちならぬ事態になってしまいます。

それこそマザーテレサの「そこから先は神さまとご本人の問題です」という委ねこそ大事なのです。

政治家が洗礼を受けると、それは票を欲しいからだろうとか、自分の商売に利用しようとしているとか、うわさされることがあります。

厳密に自分のことを考えれば、ほんとうに神さまに満足してもらえない動機など誰も持たないのに、他の人の動機を、思わず裁いてしまうことがあります。

神さまは、人間のどんな動機をも利用して、ご自分のもとに人を呼んでおられるということも、しっかりと捉えておかなければなりません。

今年「パウロ年」ですが、パウロもまた、最初はキリスト教を迫害していたのだということです。

Q. 「いくばくかの人の慰めといやしになる」ということを言われると「なるほど」と思わずうなずいてしまいますが、現実を見るとまた悩んでしまいます。具体的にはとて

も言えませんが、現実にはそれとは逆のことが見えてしまうからです。どうしたら良いのでしょうか。

A. 言いたいことは、教会内を見回すとき、必ずしも人を慰めたりいやしたりするような、豊かな人格を持った者ばかりいるわけではない、ということでしょうか。

かつて教会内には、聖なる者ばかりが入るのであり、酒も飲まず遊びもせず、祈りばかりする人々の集まりが教会である、というイメージがあつたことも事実です。

しかし、現実はずっとそんなものではありません。むしろ一般社会の方が、よほど豊かな人格を持つてゐることだつてあります。

とくに最近ではセクハラ（性的虐待）パワハラ（地位を利用した人権侵害）の問題なども表面化しつつあります。

ですから第一面で行われているように、ミッション（宣教）から「エヴァンジェリゼーション」（福音宣教）へと考え方を変える必要があるのです。

ミッションとしての宣教とは、どちらかと言うと、真理は自分のみありという考え方で、邪教征伐型の宣教であり、教えてあげるといふ態度が、背後にあるやり方と言えらるでしょう。

エヴァンジェリゼーションとしての宣教のことを、福音化または福音宣教と言った

りしますが、これは、教会内の自分たちも、不完全な者であることを認め、一般社会の心ある方々と一緒になって、イエス・キリストの姿に近づくこと、すなわち、真の安らぎをもたらす者となることができるように、努めるということを指します。

すべての人は、教会内にある人もそうでない人も、神さまであるイエス・キリストの、ほんものの安らぎといやしを、渴くように求めているのだからです。

Q. 宣教というと、信者の数を増やすことも含むのではないのでしょうか。

A. 信者の数を増やすというより、前述のような教会の本来の姿になるよう努力するとき、その共同体から、何とも言えない安らぎに満ちた神さまの雰囲気が漂い、蜂が蜜を求めて集まるように、自然に数も増えるということではないでしょうか。

そのような雰囲気を作るためのとても有効な手段として、本紙四〜五頁に毎回掲載されている、分かち合いの方法があることも付け加えておきます。

これは、一九九九年、西日本宣教司祭大会で、先日帰天された韓国のキム・スーハン枢機卿さまが、記念講演の中で紹介してくださった方法でもあります。

新しい要理

「共に歩む旅」

(17)

第十五課 「聖霊」



〔進行係〕(参加者を歓迎して、十字架の印をしながら集いを始める)

「どなたか祈りで神さまをこの集いに招いてくださいませんか。」

(誰でも自由な祈りを捧げるか、以下の例文で祈ってもよい)

・主よ、この集いに来てくださり、私たちの心をあなたの愛で満たしてください。

・主よ、ここにおいでくださり、私たちの鈍い心を柔らかくしてください。

A. 私たちの生活

〔進行係〕

次の文はさだまさしの「風に立つライオン」の歌詞です。曲を聞きながら読んでみましょう。

風に立つライオン

「突然の手紙には驚いたけど嬉しかった 何より君が僕を恨んでいなかったということが これから此処で過ごす僕の毎日の大切なよりどころになります ありがとうございます ありがとう」

ナイロビで迎える三度目の四月が来て今更 千鳥ヶ淵で昔君と見た夜桜が恋しくて 故郷ではなく東京の桜が恋しいということが自分でもおかしい位です おかしい位です

三年の間あちらこちらを廻り その感動を君と分けたいと思ったことが沢山ありました ビクトリア湖の朝焼け 一〇〇万羽のフラミンゴが一斉に翔び発つ時 暗くなる空や キリマン

ジャロの白い雪 草原の象のシルエット 何より僕の患者たちの瞳の美しさ

この偉大な自然の中で病と向かい合えば 神様について ヒトについて 考えるものですね やはり僕たちの国は残念だけれど何か大切な処で道を間違えたようですね 去年のクリスマスは国境近くの村で過ごしました こんな処にもサンタクロースはやって来ます

去年は僕でした 闇の中ではじける彼等の祈りと激しいリズム 南十字星 満天の星 そして天の川 診療所に集まる人々は病気だけれど 少なくとも心は僕より健康なのですよ 僕はやはり来てよかったと思っています 辛いのではない と言えば嘘になるけど しあわせです

あなたや日本を捨てたわけではなく 僕は「現在(いま)」を生きることに思い上がりたくないのです

空を切り裂いて落下する滝のようには 僕はよどみない生命を生きたい キリマンジャロの白い雪 それを支える紺碧の空 僕は風に向かって立つライオンでありたい くれぐれも皆さんによりしく伝えてください 最後になりましたが あなたの幸福を 心から遠く

から いつも祈っています。おめでとう さよなら

これは、内面の声に抗しきれず恋人と別れて、ケニアのナイロビに行ってしまった、青年医師の手紙に節をつけたものです。この手紙は別れた恋人が、その別れを受け入れ、新たな結婚を決意したことを知らせる手紙への返事です。

〔進行係〕(参加者たちに質問する)

①「この文を読み、曲を聞いて感じたことをお互いに話し合ってみましょう。」

②「目の前のしあわせを捨ててままで、そして大好きな恋人と別れてまで、貧しい人々のところに出発したこの医師を突き動かしたものは、何だったと思いますか。そんな力を感じたことがあるか、分かち合ってみましょう。」

B. 神のことは

神は聖霊を送ってください、聖霊はこの世のどこでも働いておられます。イエスが送ってくださいと約束した聖霊は、私たちの中で働いて神を求めさせます。この聖霊のことを、聖書は息とか風と

か霊と呼んでいます。人間の奥深くで、人間を愛へと駆り立てる力を、すべての人は感じることができません。

【進行係】

「どなたか使徒言行録2・1・8（聖霊降臨）を読んでくださいませんか。」

「ほかの方がもう一度読んでくださいませんか。」

「聖書を読む・・・」

「聖書の本文中、心に響く単語あるいは一節を選んで、一人ずつ順番に祈るような心で読んでくださいませんか」

（同じ句を3回繰り返して読む間、他の人は沈黙を守ります。）

「2分間沈黙し、神が私たちに語られることばに耳を傾けましょう。」

【進行係】（参加者たちに質問する）

「あなたの心の中に個人的に響いたみことばは何でしたか。自分が選んだ単語あるいは聖書の節が、なぜ心に響いたかをお互いに話し合ってみましょう。」

私たちが共同体の中で、一致と

愛をつくり出す時、聖霊がこの世で私たちと一緒に働いておられることを感じることができません。



【進行係】

「ガラテヤア5・16・26（聖霊の実りと肉の業）を読み、肉の業と聖霊の実りを本文からさがして書き出してみましょう。」

【参考聖書】

*ヨハネ 14・15・26

聖霊の約束

*ヨハネ 16・5・15

聖霊がされること

*使徒 10・44・48

聖霊を受けた異邦人

C. さらに一歩進んで

旅をつづけよう

聖霊は、弟子たちを通して信仰を伝えさせ（ヨハネ15・26・27）人々に新しい生命を与えてくださいました（Ⅱコリント3・6）。

私たちは、イエスの名によって洗礼を受け、聖霊を頂いたことによつて、神の子供となりました。聖霊はいつも私たちの中で働かれ、私たちの現在と未来を照らし、導いてくださいます。

【進行係】（参加者たちに質問する）

聖霊の実り・・・

愛、喜び、平和、忍耐、親切、善行、真実、柔和、節制

①右の聖霊の実りの中で、私にとって一番不足しがちな実りは何ですか。

自分が選んだ聖霊の実りを1週間実践してみましょう。

②聖霊を招待する祈りを一緒にしてみよう。

「聖霊来てください」（カトリック聖歌142番）を歌いながら聖霊を招待しましょう。

*各自順番に「私に聖霊の……お

恵みを下さい」と祈ります。

【進行係】

自由な祈りをささげながらこの集いを終わります。

【進行係の心得】

*「霊」ということばに抱く日本人のイメージは、もしかしたらオカルト風のものも、含まれているかもしれない。すべての人間の内面の、奥深くに潜む愛の衝動と、その根源のエネルギを、この「霊」に感じとれるよう、リードすることが大切である。

【覚えましょう】

聖霊とは何ですか。

*聖霊とは神の愛の息吹です、三位一体の神の第三位であり、父である神と御子である神の、完全な一致と交わりを、この世界に満たします。

聖霊はどんな賜を人々に与えますか。

*人それぞれに必要な賜物を与え、共同体に有益な奉仕ができるように、人々を照らし導きます。



第1 問題提記

昨年(2008年)は、故永井隆博士生誕百周年にあたり、長崎市内はもちろん、県内外や、広く海外でさえも、いろいろな記念行事が、盛大に行なわれました。

このような事実、多くの方々が、永井博士の業績を称え、その生誕百周年を祝っているしるしです。しかし他方、永井への厳しい批判の声も再浮上し、かれへの誤解が、いかに根深いかを、改めて再確認させられる機会ともなりました。

このような状況下、長崎大司教区内では、この機会に、永井への誤解や批判を少しでも払拭することは、われわれ長崎教区民の使命ではないだろうか、と考える熱心な信徒たちによって、永井博士の正しい思想を伝えるべく講演会が企画され、早速、『永井隆博士の思想を語る』実行委員会が組織されました。

そしてこの講演会の講師の役が、わたし自身に割当てられました。わたしは、かれら実行委員の方々の熱意に感動し、心から同意して、躊躇なくこの大切な講師の役を快諾しました。

そして長崎市立図書館の多目的ホールで、昨年8月3日には、「永井と『神の摂理』」について、12月7日には、「永井の『いけにえ論』」、そして今年1月18日には、「永井の『平和論』」と、連続三回の講演会を開催

しました。幸い、三回の連続講演会には、ホール満席の参加者の賛同を得まして、好評のうちに、予定通り終了することができました。わたし自身も、あらためて人々の永井への関心の高さを知らされ、博士に対して敬意を新たにすることができました。

他方、時を同じくして、自治労長崎県職員連合労働組合発行の『長崎消息』の、2008年11月号から今年2月号まで、「永井隆博士生誕100周年によせて」と題して、全6回の連載の機会も与えられました。ところが掲載第3回目(2008年11月、No152号)の「モニターの声」には、わたしの前回の記事について、県OBの森 草一郎氏から、次のような厳しい批判が記載されていました。ここで、森氏の批判を、原文のままご紹介しましょう。

「永井博士の『原爆投下は神の摂理である論』、は到底容認できない論であり、原爆を投下したアメリカの戦争犯罪を覆い隠す妄論です。カトリックの神父とはいえ、いまだこの永井論を擁

護する人がいるのには呆れざるを得ません。」

呆れられたわたしは、あえて反論もしませんでした。永井についてのこのような拒絶反応がまだある事実は、終戦後60余年の歳月を経た今日でも、永井批判がまだ根深く残っている事実を、雄弁に物語っている、と言えます。

決して少なくはない、種々の永井批判の根本的根拠は、かれのいわゆる「神の摂理論」にあると言っても、決して過言ではありません。

わたしは、今回の『永井隆博士の思想を語る』と題して行った三回の連続講演を準備するために、『永井隆全集』(サンパウロ)全三巻と、これに関連する諸著書、特に永井批判についての著書や論文には、一応目を通し、わたしなりに、熱心に読んだつもりです。

そしてわたしは、永井への主な批判の根源は、まさにかれの「原爆投下は神の摂理である」とする、いわゆる「摂理論」にあるとの確信を新たにすることができました。

永井批判者たちは、異口同音に、原爆投下が「神の摂理」であるなら

ば、戦争と原爆投下の責任は、「神ご自身である」ということになり、それは、アメリカの最高軍部や、当時の天皇を頂点とした、日本帝国軍部の戦争責任などは一切封印され、これらの戦争責任は全く問われないことになる、と言うのです。

この点について、明確に批判しておられるお二人の意見をご紹介します。

まずはカトリック作家・井上ひさし氏のそれです。井上ひさし氏は、『ベストセラーの戦後史』Ⅰ（文芸春秋社、平成7年）で、次のように明確な批判を展開しています。

「なんの因果でこんなむごたらしい死に方をしなければならぬのか。いったい誰が悪いのか。アメリカか。それとも国体護持にこだわってポツダム宣言の受諾を遅らせていた、大日本帝国の最高責任者たちか。そんなことを詮索しても仕様がなない。それもこれも神の摂理だから。」という具合に、神の摂理を持ち出せば、人間世界から責任者を出さずにすむわけだ。為政者に

とってこんな都合のいい話はない。そこで占領軍の検閲から、この『長崎の鐘』だけは免れたのではないかと筆者には思われるのである。

もうあれこれ過去を詮索しても仕様がなない。われわれはとにかく生き残ったのだから、将来を見据えて、さらに生きつづけなければならぬ、という考え方も日本人の間にうまれてきている。すべては神の摂理、天主の恩寵という始末のつけ方が、カトリックとやらにあるのなら、そいつを拝借して、ひとまず過去は清算済みにしようではないか。永井の思想は、当の日本人にとって便利重宝なものだったのである」（62、63頁）

同じ問題について、もう一人ご紹介しなければならぬ方は、長崎大学前教授・高橋真司氏の批判です。ただしここでお断りしておかなければならないことは、これは井上氏の場合にも言えることですが、高橋が次のような永井批判を展開してか

ら、すでに14年の歳月が過ぎ去っていることです。わたしは、高橋教授とはすでに20年来の友人で、現在、高橋は、カトリックの洗礼を受けられ、熱心なカトリック信徒として、いろいろと平和活動もなさっていますし、最近、「聖母文庫」の一冊として出版された『詩集・緑色のまなざし』には、「死者の願いに耳をすませよ：永井隆の場合」と題した、永井について詳しい記事が記載されています。

したがって高橋のかつての厳しい永井批判も、今日では完全に変わっている可能性もありますが、以下は、教授が、かつて『長崎にあつて哲学する』Ⅰ（北樹出版、1994年）で発表している永井批判を、ここでは部分的にご紹介しましょう。

かれは「浦上燔祭説」の歴史的意義として、二重の免責を挙げています。第一の免責は、戦争、原爆投下への責任のそれです。かれは、「長崎への原爆投下がもし神の摂理であれば、無謀な十五年の戦争を開始遂行し、戦争の終結を遅延させた、天皇を頂点とする、日本国家の最高責

任者たちの責任は、免除されることになる」と言います。

かれが主張する二つ目の免責は、原子爆弾を投下したアメリカ合衆国の最高責任者たちのそれです。高橋は、「同様に、原子爆弾を使用した、アメリカ合衆国の最高責任者たちの責任もまた、免除されることになる」と言います。

そしてかれは、「永井隆は、『ロザリオの鎖』や『長崎の鐘』（日比谷出版社）を公刊されたとき、そこに盛られた浦上燔祭説が、こうした責任の追及を封鎖することになることを自覚していた、とわたしは思う」と結論しています。

だからわたしは、永井の思想弁護の出発点として、かれの「摂理論」から始めます。



大司教談話室 ⑦

教区とは何か？



Q. 教会に行くと「教区」ということばをよく耳にします。よく聞いていると、自分が通っている教会とは関係がないもののようなのです。「教区」とは何ですか。

A. 構造の点から見ると、カトリック教会は、カトリックの洗礼を受けた人々の共同体として全世界に広がっていますが、単一で一つだけです。これを「普遍教会」(Ecclesia universalis)と呼びます。

しかし、この普遍教会は、具体的には、多くの「部分教会」(Ecclesia particularis/localis)において存在し、それらから成り立っています。この部分教会の典型が「教区」です。

「教区」と訳されているラテン語「ディオキセス」(diocesis)は、ギリシア語「ディオキシス」(diokesis:「行政区」)に由来します。実は、キリスト教が初めて伝えられ、徐々に共同体が作られていくに従って、段階的に「使徒座知牧区」、「使徒座代理区」そして「教区」となりま

す。最初の二つは、まだ教区として成り立つ前の状態で、それぞれ使徒座知牧区長(司祭)、使徒座代理区長(名義司教)によって教皇の名で治められます。

それに対して教区は、司教、司祭団、信徒から成り立つ完結した形の教会と言えます。信者の共同体が教会として存在するためには、まず司教、そして協力者の司祭が、いなければなりません。

教会法第三六八条によれば、教区とは、「司祭団の協力のもとに司牧すべく、司教に委託された神の民の一部分」であり、「自らの牧者に堅く結ばれ、かつ牧者によって、福音とミサをとおして、聖霊において集められ、部分教会を構成する。そこに、一、聖、公、使徒伝承のキリストの教会が真に現存し、かつ活動する。」

たとえば、一八四六年に日本全体が使徒座代理区とされましたが、初代と第二代代理区長は日本に上陸さえできませんでした。一八六六年に、第三代日本使徒座代理区長に任命され、司教に叙階されたプッチャン司教様が、事実上初めて日本全体を司牧しました。

東京、長崎、大阪、函館に「教区」が設立されたのは、一八九一年のことです。当時、ほかの地域は、使徒座知牧区、あるいは使徒座代理区でした。その後徐々に教区が増設され、現在十六を数えます。

また、日本には東京(一八九一年)、長崎(一九五九年)大阪(一九六九年)の三つの大司教区があります。それぞれの近隣の諸教区が教会管区を構成し、大司教が管区大司教として、その教会管区を主宰します。因みに、長崎教区が

大司教区に昇格して、今年の五月四日で、五十年になります。

一方、各教区は、小教区に分割されます。小教区は、教区において恒常的に設立された、一定のキリスト信者の共同体です。

その司牧は、教区司教の権威のもとに、その固有の司牧者としての主任司祭に委託されています。つまり、教区はすべての小教区から成り立っていますが、小教区は一つの教区に包括されています。

法的に言えば、各教区は、法人格を有し、日本の法律でも宗教法人です。従って、すべての小教区の土地や建物などは教区の名義になります。経済的にも教区全体として機能しなければなりません。

また、共通の活動をとおして司牧を推進するために、近隣の諸小教区を包括して地区のようなものをつくることができます。長崎教区には、長崎北・中・南、佐世保、平戸、上五島、下五島の七つの地区があり、地区長がそれを統轄します。

教区の牧者は一人の教区司教です。教区の補佐司教、教皇庁関係で働く枢機卿、大司教、司教はみな名義司教です。

ローマ教区の司教は、同時にペトロの後継者であり全世界の司教団の頭および普遍教会の最高牧者すなわち教皇です。すべての司教は、使徒の後継者として司教団の一員となり、部分教会(教区)の一致の目に見える原点および基礎であり、ローマ教皇と一致し交わりながら、全教会の一致と多様性と普遍性を示します。

(高見三見)



『学費を出して いただけますか』

私が仕事をしている子育て支援センターは、在宅で子育てをしているママの支援を目的として、0歳から3歳までの子どもを持つお母さんが、子どもと一緒に遊びに来る場所です。そこで毎月2回、小児相談をしていただいている、S先生（小児科女医）がいます。

S先生は今の社会で、子どもの心が生き生きと育たないので、多くの殺傷事件が起こっていると、心を痛めておられます。こういう時代に、この支援センターは、その人の性格の根っこである「三つ子の魂」が育つ時期に、母と子の関係を、意識的にしっかり作っていく場となっていることに感動し、子どもの将来に希望を持てるようになったと、毎回センターの相談日に来るのが楽しみだと言われます。

S先生は子どもの根っこに、生きることは楽しいという心を育てたいと言います。その為には、お母さんが、しっかりわが子を抱きしめてあげてほしい。そして母親の笑顔を見せ、やさしい声をかけて、その子が笑顔になるように、心掛けていけば、生きる力が育つと希望を持っています。

あるお母さんが来て、「2番目の子は手がかからないですけど…」と言うと「手がかからないのは有難いんですけど、安心していただけませんよ。」と言われます。本来子どもは手がかかるもので、そこで母親がその子に手をかけなくなると、母子関係が十分に出来ないことになり、その後の成長で難しくなることがあるから、しっかり抱いて笑顔を見せてやる事は続けて下さい、と言われます。上の子も手を抜かず、同じようにしてあげると、お母さんの忙しさを見て、少しずつ、がまんする事ができるようになると言われています。

そして子どもは2才前後になると自己主張が出てきますが、それからが更に親の役割が大きく、親にも忍耐が要求される…非常に大事な時期です。どこまで、子どもの主張を許すかという迷いが常にあります。やはり、人に迷惑になることは何か、小さい時から教えていくこと。人が生きる上で、自分の思い通りにならないことがあるということを、体験させ教えることが、現代の親となった者の大事な役目だと言われます。

S先生は1929年、世界恐慌の年に生まれ、15年戦争と言われる時代に育ち、16才で終戦を迎えていま

す。その中で育った忍耐力は抜群で、それが自分を育ててくれたとおっしゃいます。

学生時代、「皆さんは、社会に役立つ為に勉強するのです。」と言われたことを覚えており、その頃から、医者になりたいと思っていたそうです。S先生は、7人兄弟姉妹の真ん中で、父親は病弱、一番上の兄は兵隊で戦争に出ており、(26才で戦死)、母親1人で家計をやりくりする生活の中で育っています。経済的に進学は困難な状況だと知りながら、夢をあきらめず、近所のお医者さんの所へ1人で行き、「私は医学校へ行きたいけれど、入学試験に合格したら、学費を出して頂けますか」と頼みに行ったそうです。

すると即座に「いいよ、入学試験に合格したら出して上げるから頑張りなさい」と返事をされたそうです。

それを聞いた時、私は思わず「どっちもえらい！」と言ってしまいました。日本の敗戦直前の混乱した時期に、医者になる夢を持ち続けたS先生も素晴らしいし、またいくら親しい近所の子どもであっても、医学部の学費を支援してあげようと言う人がいたのかと思うと感動しました。

そんなS先生も、結婚し、子育てもされ、現在まで医師の仕事が続けてくるのには大変なご苦労もあったようです。特に外科医であったご主人が亡くなられる前の5年間の闘病生活では、難問が重なり、独りで途方にくれた時、救われたのが聖書のことばだったそうです。

S先生は、教会での日曜礼拝に3年間程、通われた事があり、その時に学んだものが「神様は、その人が背負えない重荷はお与えにならない」という言葉でした。だから「この問題が来たということは、私に解決できるということだ」といつも思って、乗り越えられたとおっしゃいました。

先生の育った、時代の方も大きなものですが、言葉の力によって、人は支えられるということを実感いたしました。

今も現役のお医者様でらっしゃいますが、常に前向きで、勉強熱心で、自立した生き方をされておられます。私の大きな目標となる方です。

ますもと さよこ
(長崎いのちを大切に作る会)



委員会再編と

長崎教区の宣教活動

(一) 神のメッセージへの人間の感度

人間が人間的行動をし、その範囲を逸脱しないようにするためにはどうしたらよいのでしょうか。

外側から囲いを作って出て行かないようにする方法がまず考えられます。もう一つは人間一人ひとりの中に、「人間プログラム」とも言うべきものはめ込み、人間がそれを心の声としてとらえ、行動していく仕組みにする方法です。

人間の構造は後者の方です。これを良心と言ひ、別の表現で言えば、神さまの声です。

人間は人間である限り、密やかな神さまの声を聞き、誰に教わることもなく、原則的な行動の善し悪しを判断できるようになっています。

教会は、まずはそういう人間の集まりであり集合体です。そしてその上に、より明確に神さまの声を聞き分けることができるように、書かれたものやそうでない聖伝と言われるものによるメッセージが、伝えられる仕組みになっています。

さらにそのメッセージ伝達は、念には念を入れて配慮されています。何と神の子イエス・キリストの中から、人間を取り込んで抱きかかえてしまったのです。これが「神秘的なからだ」と言われる教会であります。

そしてさらにさらに、神さまの仕掛けはそれだけに留まらないのです。目に見える形で、イエス・キリストご自身を食べよ、と言われのです。これがご聖体です。

ここまで来ると、神さまのメッセージを知るための感度など、磨く必要もないという考えにさえなつてきます。まさにそのとおりではありますが、現実にはそうはいかないということがあつて、これがまた人間の人間たるゆえんでもあります。

(二) 磨かれた感度が捉えた教会像

ここ四十数年「公会議」ということばをよく口にもし、耳にもします。一九六二年から六五年にかけて開かれた全世界の司教様方の会議です。現代教会は、そこで決まった方向にしたがつて、今進んでいるわけです。

この公会議の精神を、象徴的に表現しているのが、有名な「現代世界憲章」の冒頭のことばです。

「現代人の喜びと希望、悲しみと苦しみ、特に貧しい人々とすべての苦しんでいる人々のものはキリストの弟子たちの喜びと希望、悲しみと苦しみでもある。真に人間的な事柄で、キリストの弟子たちの心に反響を呼び起こさないものは一つもない」(現・No1)と。

そして、この公会議の日本版とも言うべき、福音宣教推進全国会議(NICE)は、さらに具体的プランを造るための柱として三点を挙げています。

①日本の社会とともに歩む教会 ②生活を通して育てられる信仰 ③福音宣教する小教区です。

さて、このように上段からふりかぶってみても現実はそのような動きとは関わりないし、わたしたち

信者にどうこう言われても、どうしてよいか分からないという声が聞こえてきます。それは無理やらぬことでもあります。しかし悲観する必要はありません。

長崎教区には、この公会議の活力に満ちた精神を、血とし肉として派遣されている、リーダーの方々、早や大半を占めるまでになっているのです。一〇〇名前後の教区司祭の大半は、この新しい教会像と宣教魂を身に付けた方々ばかりです。

今ほどイエス・キリストの心を心として、社会に奉仕することのできる教区づくりが、可能な時はあります。

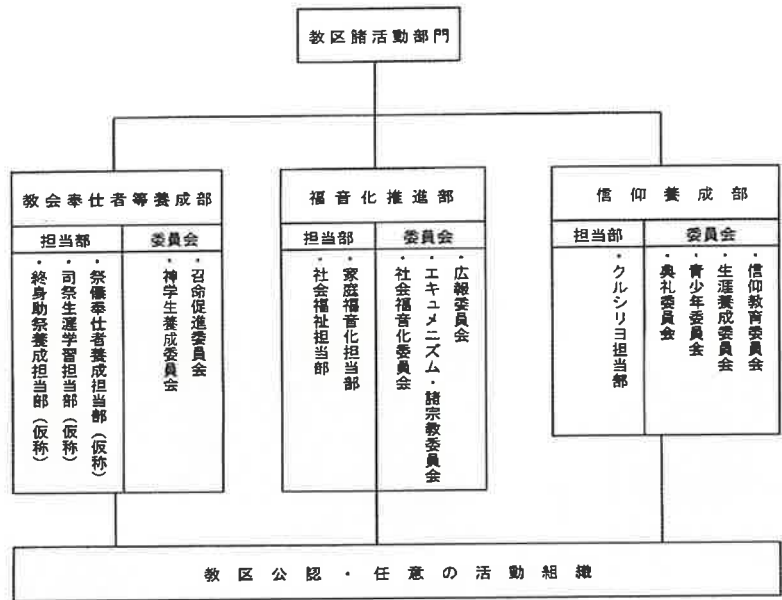
(三) 役割分担

ただ、「真に人間的な事柄で、キリストの弟子たちの心に反響をよび起こさないものはない」と言われても、すべてを引き受けることができるわけではありません。現実には、とてもそういう体制は整っていないし、自分たちの身の丈というものもあります。あまり背伸びしても長続きすると思えません。

しかし、同時に私たちは「キリストの背丈に達するよう」(エフェソ4章)招かれていることも事実です。

そこで、すべての事柄に関することはできませんが、その中で現代の教会として、これだけは欠かせない、と思われる事がらにしばって、活動分野を設定せざるを得ないこととなります。

その分野と役割分担のシステムが、左図の示すとおりのものであります。



すでにそれぞれの分野の責任者が任命され、二〇〇八年四月から、第三期目の活動が、再編された形で進められているところだ。

これは教区レベルの仕組みですが、地区や小教区においては、この中から現実と照らし合わせながら編成していくこととなります。そのまま取り入れる分野もあるでしょう。或いは地域・小教区事情に合わせて、他の分野を設けて、役割分担の仕組みをつくり上げていくこともできます。

（四）稼働率一割アップを

このように述べてくると、長崎教区は相当の業務拡張を目指している、と思われるにちがいない。そしてこんな活動をすれば、主旨は分らないでもないが、相当費用もかかるだろうし、ましてやいま、大変な不況に陥りつつある時にとんでもないと。ちゃんとミサに行き、朝晩の祈りをしていけばよいのだと。

もっともなご意見ですし、正当な考えでもありません。ですからご意見にしたがい、ミサに行き祈りをするだけで済ますことのできる余裕のある状況でできるだけ早く、つくり出さねばなりません。その状況とは、この世から、貧しさ、不平等、孤独など、つまり現代人の悲しみと苦しみがなくなるか、あるいは少なくとも、ミサや祈りに専念するだけで、こと足りるようになることです。

この状況をつくり出すために、キリストの愛に突き動かされた弟子たちは、やむにやまれず、活動してしまおうのです。そのために、やむにやまれずミサに行き祈ってしまうのです。

よく言われることですが、一九二七年、邦人司教区となつて、長崎教区がパリミッシヨンから教区運営を受け継いだ時と今とは、教区全体の規模はあまり変わっていません。

小教区の数や信徒数も、そんなに変化はないのです。ただ大きくちがっているのが司祭の数です。当時二十八名の司祭で、ほぼ今のスケールの教区を運営していたことになりました。

それから司祭の数は、約三倍の伸びを実現しました。全体のスケールは変わらないのに、司祭の数が三倍ということは、何を意味しているのか

でしょう。

それはこの八十年の間に、信徒も含めて、役割分担して進めるべき教区の諸活動の大部分を、司祭にのみ背負わせる仕組みをつくってしまったことを意味していると、とれなくもありません。事実司祭たちは、大変な忙しさに忙殺されている、というのが実状のようです。

かつての状態にもどれ、とまでは言わないまでも、せめて一割、稼働率を上げることができれば、長崎教区は別次元的に爆発するエネルギーを生み出すことでしょう。

そのための人材育成はあらゆる分野で進んでいきます。人材はすでにスタンバイの状態にあると言っても言い過ぎではありません。

最後にもう一点。それは「ねばならない体質」の一扫ということ。それは「それは義務ですか」という質問をよく受けることがあります。

キリストの弟子の、活動に向かう姿勢とは、義務による要請の、数億倍、数兆倍の神の愛の要請に、その根拠をおくものです。それは、親が子に向つて仕掛ける行動の、愛に基づく動機に似ています。それが、その数億倍、数兆倍でもあります。

「現代人のよろこびと希望、悲しみと苦しみの・・・」の現代世界憲章のことばを、いま一度、キリストの弟子たちに対する、全世界への派遣を告げるファンファールとして、感度鋭く受け止めてみたいものです。

「よきサマリア人のたとえ」（ルカ10章）の第一と第二の通行人の徹を踏まないためにも。

（長崎教区本部事務局長

橋本 勲）

生活教会 の中の



福見教会

フォトプラン 山本 富夫

福見

遠見番岳の麓、立河内の地に建つ教会堂。レンガ色は景色に溶け込み、その歴史を醸し出している。

信仰の始まりは一七九九年、外海からの数人の移住によるという。

最初の教会堂は一八八二年、曾山に建立。しかし、二年後台風によって倒壊。

一九一三年、敷地を求め労働奉仕をし、レンガ造りの現教会堂を建立。

一九四八年、浜串小教区発足。高井旅とともに浜串の巡回となった。

九十余年を過ぎた教会堂は今、威風堂々として信仰の色を発している。